

---

# 雪月恋花～セツケツレンカ～

伊達倭

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

雪月恋花～セツゲツレンカ～

### 【Zコード】

N1234C

### 【作者名】

伊達倭

### 【あらすじ】

雪山で遭難した大学生、マコト。彼を救ったのは、浅黄色の和服に身を包んだ、愛らしい少女だった。極寒の吹雪の中に起った、ほんのりと暖かいラヴ・コメディ。

我が身の不遇を呪うのはやぶさかではない。

偏屈な大学の教授が突然、スキー旅行に誘ってきた時点で、ヤバイと思うべきであった。

「フィールドワークも兼ねていてな。暇があれば、少し研究も手伝つて貰うぞ」

民俗学という学問は、日本にやつて来てまだ日が浅い。日本民俗学の父、柳田国男氏の教えを受けたという教授は、地方の言い伝えを研究する老獴な人物である。師の教えに乗つ取り、文献ではなく直に現地の人の声を聞くフィールドワークを好む、歳に似合わぬ活動的な姿勢は、研究の分野になぞらえて、妖怪ジジイの渾名がよく似合つていた。

今回の研究は、雪国の山岳信仰ということで、学生を集めるためにスキー旅行と銘打つての実施となつたわけなのだが。思惑をはずれてというか、当然というか、参加者は全員、スキーに興じていた。俺とて、勿論そのつもりであった。確かに教授のゼミを受講していくて、民俗学には少なからず興味もあつた。だが、目の前にスキー板をぶら下げられては、熱心に研究に励む氣にもなれず、ウェアを着込んで、颯爽とグレンデを滑ることに夢中になつた。

教授は教授で、研究に夢中になつていて、遊びほうける学生のことなど頭の片隅にも残つていなかつたのだろう。冬の田舎を、厚手のコートを着て歩き回つていた。

「それで、何故俺は、こんなことになつてるんだ？」

友人達と滑つていたのは数時間前のこと。なまじ上手く滑つていたばかりに魔が差して、一人でコースを外れたのが間違いだつた。気がつくと、あたりは一面の雪野原。人つ子一人いない、雪の山の中だつた。

来た道を戻るうと試みたが、一体どのように進んできたのだろう

か。風景では察しがつかないのが雪山である。滑れば滑るほどに人生の果てに行き着きそうな気がして、俺は立ち往生するほか無かつた。

身体はがくがくと震え、鼻水は凍っていた。息をするのも辛い冷気は、確実に命の灯火を吹き消そうとしていた。完全無欠の遭難者と化したところに、追い打ちのように雪が猛烈な勢いで降ってきて、一寸先もわからぬ状態になつた。いつそ大声を出して、雪崩に乗つて帰ろうかとも考えたが、死期を早めるだけだと思つてどまつた。新雪に遮られて役に立たなくなつたスキー板を投げ出したところで、ついに意識が朦朧としてきた。

笑つていた膝が、急にがくんと機能を失う。ビサツといふ音は、自分の身体が倒れた音だつた。

雪に顔を埋める形になるが、身体は言つことを聞かない。しかも、段々どうでも良くなつてきて、堪えきれない眠気までが襲つてきた。駄目だと思つほど、意識は深く沈んでゆく。いつしか、駄目だと叫んでいるのが、自分ではないような気がして

俺は、意識を失つた。

混濁した意識、といふのは名状しがたい物がある。寝起きのぼんやりとした頭と、一日酔いの気分の悪さ。その状態でプロボクサーのストレートを顔面に喰らつた状態と喻えることができるが、自分で喻えておいて、意味がわからぬ。

酸欠のようすに視界の端は白んでいて、それなのにどんより暗い。相反した情報に余計に気分が悪くなり、それが過ぎて、思い切り跳ね起きた。見ると、板張りの古めかしい日本家屋の真ん中であつた。日本家屋と言つても、相當に古い物である。部屋の真ん中には囲炉裏が設けられていて、炭がぼんやりと赤く灯つてゐる。障子は黄色く変色していく、年季が入つてゐた。

「気がつきましたか？」

ふと、女の声が聞こえた。驚いて見回してみると、すいと障子が開き、俺よりも幾分か年下の少女が、ちょこんと正座をして、こつちを見ていた。肩口で切りそろえられた黒髪と、時代錯誤の艶やかな黄色の着物が印象的だつた。

「君が、助けてくれたのか」

どうやら、死後の世界というわけでもないらしい。居住まいを正して少女と向き合つ。ありがとうと礼を言つと、少女は屈託なく「いえいえ、当然のことですよ」と笑つた。

「麓まで降りた帰りに、貴方が倒れているのを見つけたんです。近くにスキー板があつたんですが、すいません。貴方を運ぶのに精一杯で、それまでは持つてこれませんでした」

「いや、そんなことは気にしないでくれ。」ひつして命を助けて貰つただけで、感謝でいっぱいだ

危うく死ぬところだつたのだ。礼を言つはづが、謝られては、それこそ申し訳が立たなかつた。

「本当に助かつた。ありがとう」

改めて少女に頭を下げる。こんな少女が、俺を運んでくれたのだ。見ると、あどけない顔立ちながらも美人で、和服がよく似合つていた。雪のように白く透いた肌。ほやつとした目。ちょこんと低いが整つた鼻筋。人形のように綺麗だ。

「ふふ、いいんですよ。当然のことをしたまでですから。さあ、それよりも温かい物でも食べましょ。お粥を作つてあるんですよ」

今時、こんなに良い子がいるのだろうか。囲炉裏にかかつっていた鍋から湯気のたつたお粥をついでくれる様子は、上品で、そこはかとなく可愛い。

ありがたくお椀を受け取り、一口する。しつこくないのに甘つたるい。甘酒の味だつた。

「身体が冷えていますから。お口に合いませんでした?」  
「いや、美味しいよ。それに暖まる」

甘酒はそもそも米から作るので、お粥との相性も抜群である。冷

えた身体に心地よい。

「よかつた。生姜も入れますか？ 身体がとつても暖まるんですよ？」

ひょいと生姜を取り出して少女が微笑む。甘酒と言えば生姜。最近の少女はそんなことは知らないと思っていたのだが。

なんだかほつとした気分になつた。

「あ、うん。ありがたくいただくよ」

俺がそういうと、少女は棚からおろし金を取り出して、さわりとお椀におろし生姜をふりかけてくれた。改めて食べてみると、甘酒の甘みに、生姜の何とも言えない味がよく合つていて、美味しい。身体も、内側からぽかぽかと暖まってきた。

「うん、美味しい。遭難もしてみるもんだな。こんなに美味しいお粥、初めてだ」

「ふふ、ありがとうございます。作った甲斐がありました」  
さつきまでの気分の悪さも綺麗に吹き飛んで、身体も温まつたのか、人心地がついた。生来の気楽さが出てきたのか、冗談が言えるまでに回復したようだ。

「ふう、じつねつさま。本当になんてお礼を言つたらいいかわからぬいよ」

「お粗末様です。一人暮らしの暇人ですから、貴方が来ててくれて嬉しいくらいですし、気にならないでください。落ち着いたら、お風呂をどうぞ。ちょっと自慢のお風呂なんですよ」

無垢な笑みは、本当に俺が居て嬉しいといつように見える。実際は迷惑しているだらうな、と思いつながらも少し良い気分になつた。少女は手際よく食事の後片付けをして、再びちよこんと正座をした。そういえば、まだ名前も聞いていなかつた。

「ええと、君の名前は？」

「リック、と言います。六つの花とかいて、六花」

六花。確か、雪の異名だ。雪の結晶が六弁の花に似ていることから、つけられていたように思つ。名付け親はさぞ喜んでいるだらう。

」の少女はまさしく雪のよう、白く、美しい。

「綺麗な名前だね。俺は不動。不動マコトっていふんだ。新選組の誠一文字」

「かつこいこですね。マコトさんでいいですか？」

「うん。そつちは六花さんでいい？」

「いえ、呼び捨てでどうぞ。私の方が年下のようですし。せんつて、なんだかこそばゆいです」

「そつか。命の恩人を呼び捨てつてのもアレだけど、そういうなら六花つて呼ばせて貰うよ」

「はい。そのほうが落ち着きます」

少女 六花は微笑み、ゆっくりと立ち上がる。

「では、マコトさん。身体の中から暖まつて来ているつむじ、お風呂に入りませんか？ ウチ、見ての通りボロですが、お風呂はちよつとしたものなんですよ。少し歩きますから、今のつむじのほうがいいでしょ？」

成る程。昔ながらの家のようだし、風呂も外にあるのだろう。毒を喰らわば止まらず、ところがわけでもないが、折角だから厚意に甘えさせてもらおう。

「じゃあ入らせて貰うよ」

「では、準備をしてきますね。少し待つていてください」

六花はそう言つて隣の部屋に行つてしまつた。しかし、本当にしきくできた子だ。

料理もうまいし、器量も良い。大した会話もしていないが、性格も素直だ。一体、何があつてこんな雪山のボロ家に住んでいるのだろうか。これではまるで、雪女のようではないか。

「……ん？」

雪女、といつも単語に、ふと引っかかりを感じた。つい最近、聞いたことがあるような気がする。

「……あ、そういえば」

「」に来た本来の目的。つまり、教授の目的である。教授は確かに

出発直前に「この地方には、雪女とか、雪娘がいるという伝承がある。今回はそれを調べるつもりだ」とか言っていた。ついでに「拐かされるんじゃないぞ」とかも言っていた。

雪女と言えば、有名な怪談だ。老人と青年が雪山の小屋で一泊していると、雪女が来て、老人を殺してしまう。しかし青年があまりに美しかったために、雪女は青年に「私のことを黙つていたら、助けてあげる」と言って、逃がしてあげる。青年は無事山を下りて、その途中に知り合った娘と恋仲になり、結婚して子供をもうける。しかしその後、つい妻に「昔、雪女に会った」と話してしまう。実はその妻が雪女で、「黙つていると言つたのに」と怒つて青年を殺そうとするが、二人の間に出来た子供が可哀相だと思い直して、殺さずに姿を消す、という感じの話である。

他にも、雪女に関する伝承は多くある。不意に現れてすぐ消えるだけとか。幼子を抱いていて、「この子を抱いてください」と言って、抱くと殺されたり。殺されないが、幼子が雪だるまになつて崩れたり、とか。背丈が一丈 3・3メートルもあるとか。地方によつて色々だ。

名前を変えると、雪女郎。こいつは話しかけても散々無視して、仕方なく背を向けると、いきなり崖から突き落としてくるという非道いヤツ。いずれにしても、共通しているのは白い肌の美人であり、着物を着ているというところである。

まさに、六花の特徴のその通りであった。

「は、はは。まさかな」

俺とて、民俗学を専攻する学生である。妖怪というのは意識下に置いては存在するが、実在はしないものだ。もしくは、自然現象を指す場合もある。それに、確か雪女にしても雪女郎にしても、着物は白だつたはずだ。六花の着物は黄色だし、そもそも妖怪は実在しないとわかっているじゃないか。確かに似すぎているし、こんな山の中で独りで住んでいるというのも変だが、何か事情もあるのだろう。命の恩人を疑うとは、何事だ。

「マコトさん、準備ができましたよ」

タオルを手に持った六花がひょっこりと顔を出す。ほら見ろ。雪女ってのは、熱に弱いんだ。風呂を自慢するはずないし、そもそもタオルとかおろし金を持っている筈が無い。ましてや、さつきは熱いお粥をよそつてくれたじゃないか。

「ああ。ありがとう。じゃあ行こうか」

不躾な考えを振り切つて、立ち上がる。だが、まだ身体は温まりきっていないのか、よろけてしまった。

「マコトさん！」

六花が咄嗟に身体を支えてくれる。支えてくれた手が、ひんやりと冷たかった。

「うわっ！？」

「きやっ……！？」

振り切つたはずの思考が急に鎌首をもたげて、六花から半ば無意識のうちに飛び退いていた。

「あ……ごめんなさい。冷たかったですよね。少し外の様子を見に行っていたので、指先が冷えてしまっていたみたいですね。あ、でも大丈夫ですよ。お湯加減はばっちりです」

「あ、そ、そうか。こっちこそ悪かった。助けて貰つてばかりなのに、大声出したりして」

ぐだらないオチだつた。疑心暗鬼というのは怖いものだ。こんなに優しい雪女なんているはず無い。いや、そもそも雪女なんていいんだつけか。まあいい。気分的にも寒くなつていたので、風呂に入らせて貰おう。

「すぐそこですから」

確かに近くにあつた。

一度家を出て、夜道（既に夜になつていたらしい）を三十メートルほど歩いたところに、掘つ立て小屋のようなものがぽつんと立てていた。風が吹けば壊れそうな作りだが、家と違つてボロではない。

「私が作りました。反対側の扉を開けると、もうそこには湯ノ花です  
よ」

白慢げに六花は言うのだが。

思い切り傾いているし、風が吹くたびに揺れている。それでも、  
この雪山で立つていいのだ。ちゃんと作つてあるのだらう。  
「この中で服を脱いでくださいね。はい、タオルです。では、また  
後で」

六花の言うとおりにタオルを受け取り、掘つ立て小屋の中に入る。  
風よけにもならないが、火鉢が置いてあって、炭が赤く光を放つて  
いる。炭の燃焼時間が長いからと言って、一日も持たないはずだ。  
さつきの準備の時に出しておいてくれたのだろう。本当に良い子だ。  
俺のような招かれざる客のために、ここまでしてくれるなんて。  
雪女だと疑つた自分が恥ずかしい。

スキーウェアを脱いで、タオルで一応前を隠して反対側の扉を開  
けてみる。すると、そこには天然の温泉が広がつていた。

「うお、すっげえ！」

夜の雪原の中に、湯気の沸き立つ温泉があるなんて、六花以外に  
誰が知つているだろうか。そんなに広くもないし、雪が降つていれ  
ば、雪煙で湯気が隠れるので、まず見つけることは出来ない。六花  
が白慢げに言う気持ちがわかつた。

試しに手を浸けてみると、ちょうど良い湯加減だった。適当に掛け湯をして、湯に身体を沈める。

「く、くあああああ～～。蘇る～～～～！」

隠れた名湯、ここにあり。見れば、小屋同様、拙いながらも石で  
きちんと囲いが作られていて、まさしく温泉である。雪は無く、寒  
空に映える星のきらめきが、また何とも言えない情感を誘う。酒で  
もあれば、最高なのだが。

「お酌しましようか？」

「うわああつ！～？」

突然後ろから声をかけられて、思い切りお湯にダイブしてしまつ

た。潜つて隠れたとこりほづが正しい。

「じほづ……つ。り、り、り、六花！？」

「どうです。気持ちいいでしょ？」「

ゆづくと顔を出して、おそるおそる六花の方を見る。もしやとは思ったが、残念というか、安心したというか。ちやんと着物を着ていた。

「い、良い湯だよ。そ、それよりも戻つたんじゃなかつたのか？」

「え。また後で、つて言つたじゃないですか。掘つ立て小屋を通らなくとも、ちやんとこりほづには来れますよ？」

成る程。また後で、とこりほづは温泉で落ち合おうといつ意味だったのか。

「そ、それよりも。寒いだらつし、中に入つてたらどうだ。お酌までして貰つわけにはいかないし」

「あ、いいんですか？」

「うん、勿論」「

俺がぬくぬくと湯につかつてこるので、六花が外で寒い思いをする必要はない。というか、しては駄目だ。

「じやあ、遠慮無く」

そう言って、六花は入つた。

家中ではなく、お湯の中に。着物の裾を捲つて、素足を。

「ふふ、温かい」

「つて、違うだろーが！」

「え、あ、はこ。どうですよね。『めんなさい』」

六花が、てへつと自分の頭を小突いて見せる。なんだ、冗談か。じづ、フトモモなんかが妙に色っぽくて焦つてしまつた。

「やうですね。お風呂に入るのに、着物を着たままなんて、不作法でした。ちよつと恥ずかしいんです、けど……」

「うん、やっぱり風呂は裸で入らないと。つて、違う――――ッ！」

こきなり襟を緩めて、着物を脱いだした六花の手を慌てて掴ん

で止める。つこつこノコシシ「//」をしてしまつのは、俺の悪い癖だ。  
「ひんひ、マコトをひつ！ 隠してくださいよ～～」

「つおわつ！～？」

慌てて止めたので、自分の姿を考えていいなかつた。中腰になつて  
いた俺は、慌ててお湯にダイブした。否、潜つて逃げた。  
「すすすすす、すまんツ！～」

「い、いえ。それより、どうしたんですか。脱げと言つたのに、脱  
いだら怒るなんて」

俺の裸を見た恥ずかしさもあつてか、ちゅつヒンとした感じで  
六花はそっぽを向いた。

「だからだな。中に入れとこりの家の中の」と、お湯の中じゅ  
ないんだつて」

必死の説明に六花は成る程と頷いた。しかし、一向に襟を正そつ  
とはせずに、しばりく思案してから「やつぱり、お風呂に入りたい  
です」と、爆弾発言をした。

「あ、でも。やっぱり恥ずかしいので、後ろを向いてください  
ね」

「う、うう。うそ」

正直、物凄く困るのだが、この温泉は六花のものだし、世話にな  
つていい手前、断れなかつた。決してやましい考えがあつたわけで  
はない。いや、「めん、ちょっとはあつたかもしれない。

いそいそと後ろを向くと、後ろから衣擦れの音が聞こえた。それ  
がまた艶めかしいので、怖くなつて反対側まで進む。腰抜けとか言  
うな。これは紳士的な振る舞いなのである。

「ちやほん、というこれまで蠱惑的な音が聞こえて、ついでに「は  
ふう」なんて気持ちの良さそうな声まで耳に入つて、いよいよ混乱  
したところで「いいですよ」ってな言葉が飛び込んできた。

「いや、このままです」

「でも、お話しっこですよ？」

「いやでも、ほら

「大丈夫ですって。湯煙でほとんど見えませんから」

その言葉で、ようやく気を取り直して六花に向き合つ。確かに湯煙が邪魔で、否、湯煙のおかげで六花の肢体は見えなかつた。

「何度入つてもいいですねえ。ここに住んでいる理由の八割は、お風呂のためみたいなのですよ」

はふう、と溜息を漏らして六花が言つ。俺は「ああ」という適当な言葉でしか返せなかつた。なんというか、湯煙のチラリズムが余計にいやらしい感じになつていて、気がする。

「六花……は、恥ずかしくないのか？」

「いや、まあ恥ずかしいんですけど。ずっと一人で暮らしていますから、一人で入るお風呂って憧れてたんですね」

六花は少し寂しそうに呟いた。そう言われてしまつと、俺としてはもう何も言えない。なるべく六花を見ないよう、夜空を見上げながら星を数えた。

「こういつの、いいですね。私、今までずっと一人だったので、とても嬉しいです」

「そ、そうか？」

「はい。スキー場からここ、かなり遠いですから。マコトさんみたいに遭難する人だつて、滅多にここまで来ませんよ」

素人のくせになまじ上手かつた。そんな俺みたいなヤツだけがたどり着ける（遭難できる）わけか。

「そういうえば、最初はビビったなあ。六花つてさ、雪女に似てるか

ら

遭難した情けなさを隠すように、思いついたことを適当に並べてみる。

「俺は大学で民俗学専攻しててさ。ここに来たのも本当は雪女の伝承を調べるためだつたんだ。そんなこともあって、最初に六花を見て、雪女だと思ってさ。はは、バカだよな。命の恩人に」

調子に乗つて喋る俺を、六花がきょとんとした面持ちで見ていた。しまつた。雪女つてのはマズかったか。

「私は雪女じやないですよ」

「つ、ごめん。変なこと言つたかな……」

「……どいとなく、真面目そつな面持ちの後、六花は意を決して その割には妙に可愛らしげ声で言つた。

「雪娘です」

.....?

「ゆき、むすめ？」

「はい。雪娘ですよ。今まで氣づかなかつたんですか？」

「いや、氣づくも何も。それに雪女と雪娘つて、何か違うのだろうか。

「あ、民俗学専攻の割には知らないみたいですね。妖怪といつのは、名称が変われば、たとえ同じ特徴を持つていたとしても、それはまったく違う妖怪になるんですね？」

ゆづくじと風呂に浸かつた自称雪娘、六花はつらつらと説明した。大丈夫だらうか。溶けてたりしないか？

「それに、雪女と雪娘は一緒にされることが多いですが、ちゃんと違うところもあるんですよ。私のように『実在する妖怪』ともなると、伝承とはまた違うんですけど」

おいおいおい。今、田の前で、教授をはじめとする多くの民俗学者の通説が壊されようとしているぞ。実在する妖怪だと言つたぞ。実在しないから妖怪といつんじやなかつたのか。

「六花……？」

「雪娘の伝承も多々ありますが、この地方では雪女に近いですね。ただし、小屋を訪れるのではなく、小屋に招いて、殺さずに、助ける。この山の守り神を、雪娘と呼んでいます。っていうが、私のことなんですけど」

六花はちょっと胸を張つて。そして危つて見えそつになつたところで頬を赤らめてお湯に潜つた。

いや、どう見ても普通の女の子。しかも美人なんだけどなあ。

「雪女の伝説。あれって私の御先祖様の知り合いの話が元ですよ。あの、おじいさんを殺して、青年を逃がしたって話。人間の男性に恋をして、山を降りた珍しい雪女なんですよ。本当はおじいさんは小屋に入つたときから死んでいて、青年も死にそうだったから助けてあげた。それで、その力を秘密にしたいから脅して、ついでに惚れちゃつたからお嫁さんになっちゃつた、という実話です」

「う、嘘だろ……ってか、きちんと辻褄合つてるけど」

「はい。あと説明しておきますけど、雪女と雪娘の違いは歳を取らないか、取るかということです。雪女は歳を取らない、精霊的な存在ですけど、私たちは人間に近いので、ちゃんと歳を取ります。その分、身体も丈夫なので熱で溶けるということもないです。あ、でも寒いのは平気なんですよ。ほら、お湯の中でも肌は冷たいんですから。触ります？」

「え、あ、うん」

ついつと手を伸ばして、六花の腕に触つてみる。お湯に入つてしばらく経つというのに、雪のように冷たかった。そりやそうだ、雪娘なんだから。

……いや、なんか変な納得してないか。俺？

「ん、でも。雪娘って確かに、聞いたことあるぞ。婆さんの家に女の子が来て、泊めてくれって言うやつ。温かくして寝かせてやつたら、次の日に溶けて消えてたとか」

「はい。ありますねえ。でも、それは雪女の娘。それで雪娘って呼ぶんです。ちなみに、鳥取地方の伝承ですね。私たちは、人間に新しい存在だから、できるだけ親しみやすい名前といつじとで雪娘と呼ばれるようになつたんですよ」

す、すげえめちゃくちゃな話だ。しかし、六花の肌は本当に冷たかつたし、一人でこんな山奥に暮らしているのも、着物を着ているのも、全部納得できる。

「あ、こんなこともできますけど」

六花は「ご」となく嬉しそうに言ひて、ひゅうと息を吹いた。いや、息ではない。雪を吹いた。

「雪を吹ぐ。これが本当の吹雪。なんぢやつて」

「どうだ、と言わんばかりに六花が俺を見る。呆気にとられて何も言えない俺に、六花が少しがつかりした。なるほど、身を張つたとつておきの、ギャグだつたのだろう。

「いや、うん。面白いかどうかは別として、雪娘つてのはわかつた。すげえな、妖怪つて実在するんだ」

ちょっと興奮してしまい、独り言のように言ひ。今まで何かのトリックとか、手品とか。そんなものじゃないかと思っていたりもしたのだが、これは完全に手品で出来る範疇を超えている。信じ切れない話もあるのだが、目の前で吹雪を見せられたのでは、もう納得するしかない。六花は雪娘で、世の中にほ多分、もつと多くの妖怪がいるのだわい。

そう、民俗学的な妖怪ではない。れつきとした、きちんと質量を持つた。今、目の前で風呂に浸かっている雪娘のよつな、色々な妖怪が。キュウリの嫌いな河童とか、探せば居るかもしない。

おつと。つい、専攻分野の大発見といふことで我を忘れてしまつた。六花は俺を、どこかぼんやりした様子で見ていた。

「あ、急に黙つてごめん。でも、雪娘つてことはちやんと納得したぞ」

「あ、は、はい……」

何故か、六花は俯いてしまった。心なしか、肩が震えていくつとも思う。

「六花、どうしたんだ。やつぱり風呂は身体に毒か？」

「い、いえ。気持ちいいんです。そ、そつじやなくて。わ、私は……雪娘、なのに」

六花は涙声だった。何かマズイことを言つたのかと思つたのだが、次の瞬間、六花が抱きついてきて、思考がシャットアウトした。

「お、おおおつ！？」

「は、はじめてですよう。雪娘ってわかつても、怖がりずにしてくれたの、マコトさんがはじめてですっ！」

「え、あ、そうなの。ってか、六花、冷たい。なんかや～らかいのも当たつてる。危険。色々危険！！」

思わず少し離れる。それでも六花が雪娘であることを、文字通り体感して、それでも普通の女の子ってことも十分に体感した。

「マ、マコトさん。ひ、ひどいですよー！」

ぱろぱろと涙をこぼして、六花がねめつける。泣いてる女の子から逃げるのは、確かに非道い行為だ。

「え、あ、いや。うん、ごめん」

そう言えば、雪娘だと知つて怖がらなかつたのは俺だけだつたとか。ということは、今まで幾人もの人が訪れて、六花が雪娘だと知つた途端に怯えたのだろう。俺は呆気にとられて怯えることも出来なかつたのだが。まあ、それが幸いしたようだ。冷たいのは堪えて、ゆっくりと六花の肩に手を添えた。

「あ……」

「「めん。ひょっと驚いただけだよ。今まで、寂しかつただらう」

「マ、マコトさん！」

気障な台詞だつたと思つたが、六花はいよいよ涙の勢いも増して、再び抱きついてきた。

確かに六花の身体は冷たかつた。けど、何故か今度は暖かいものも感じ取ることが出来た。心つけてやつだらうか。小さな六花の背中をなるべく優しく撫でた。人の温もりつてやつを伝えてあげたかつたのだ。

「お、温泉より、ずっと、温かいです。とっても気持ちいい……」

「ああ、六花も温かい。みんな、バカだよな。こうしたら、怖がらなくてすむのに」

その夜。六花が泣きやむまでずっと、抱き合つていた。

大きな月と、きらめく星々。雪野原と、雪娘。

今、ようやく「うつ思つ」とが出来た。  
遭難してよかつたかな、と。

「くつくしょいーーー！」

翌日。長時間六花と抱き合っていた俺は、温泉の中で風邪をこじらせて、六花の家でまだ厄介になっていた。

「う、めんなさい。つい、嬉しくて」

「い、いや。俺に出来ることをしたまでだし。六花に助けて貰わなかつたら死んでたんだ。風邪で済んでラツキーだっクシュンーーー！」  
布団にくるまり、暖を取る。なんせ六花は滅法寒さに強いらしく、布団も薄つペらい。人肌で、と頼みたいところだが、六花に限つてそれは追い打ちになる。仕方なく団炉裏で少しでも暖かくして、布団に潜るわけだが。

「マコトさん、いつの、どうでしょうか？」

ちょっと嬉しそうに六花が俺の頭を持ち上げる。何をするのかと思えば、膝枕だった。それも、六花だからできる、『氷膝枕』である。氷枕の冷気に膝枕の柔らかさがマッチして、実に心地がよい。

「すっげえ気持ちいい」

「ふふ、よかったです」

六花はそう言って、その姿勢のままで器用に鍋からお粥をよそつて、食べさせてくれた。

「ちょっと、熱いかな」

「じゃあ冷ましますね」

ふう、と息で冷まそうとすると、お粥が凍つた。息は吹雪、だつたか。

「あう、なかなかうまくいかないです」

「じゃあ、俺が吹くよ。大丈夫、一人なら大体のことは上手くいく

はずだから

今度は熱いまま俺の口元にお粥が運ばれる。それを俺が自分で冷まして、ぱくりと食べる。

「うん。これなら大丈夫」

「…………マコトさん、一人なら、上手くいくつて、本当ですか？」  
ぐ、と六花の顔を見上げる。先ほどの嬉しそうな顔とは違つて、真面目な顔だった。

「その、もし、よろしければ……私、山を降りて暮らしたいんです。お風呂はここのが一番ですけど、やつぱり、一人は寂しいです。それに、マコトさんと離ればなれになる、悲しくなっちゃいました。どうか、お側に置いてください！」

「え……？」

「迷惑だと思います。冷たいし、息は吹雪だし。けど、一人なら……もしも、マコトさんが言つとおり、一人でない、ちやんとやつていけるのなら……」

……参つたな。この台詞は、どちらかといつと聞きたくなかった。何故かって。そりや、そうだろう。いつこうときは、男から話を切り出すものだ。

それに、俺も色々考えた。住み慣れた山から連れ出すのは、自分勝手じゃないのだろうか、と。だが六花一人を、山奥にいるだけの存在にはしたくなかった。六花は、もつといろんな楽しみを知らないといけないのだ。お風呂だけが楽しみだなんて、それではあまりに辛すぎる。それに、昨日会つたばかりの少女ではあるのだが。  
……惚れてしまつたのだ。六花に。それはもう、思い切りと言つても良いほど。

惚れた女を山にヒキコモリにさせるなんて、俺は許さない。住む場所が他になくとも、問題ない。俺の希望に添つ、最適なプランはもう頭の中出来上がつてているのだ。

「俺の家はここより狭いけど。それでよければ」

まあ、と六花の顔が明るくなる。つこでに俺の顔も明るくなつた。

「マコトさん、その、嬉しいです。本当に、いいんですか？」

「ああ、大歓迎だ。攫つても連れて行くつもりだつた」

「マ、マコトさん！…」

むぎゅ、と頭を抱きしめられる。冷たくて気持ちよくて。それでもつて、心が温かくなつた。

六花が力を抜いた。少しだけ離れて、ふと田代が命ひ。六花がゆつくりと目を閉じて、頬を赤らめた。

「……なあ、六花。一つだけ聞いていいかな？」

そうだ、忘れていた。一つだけ聞かないといけないことがある。命に関わる重要なことだ。

「雪女がキスすると、男は凍つちゃうらしいんだけど」

人生を賭したキスつてのも、趣はあるのだが。

「私は雪娘ですってばあ…！」

「いや、一応。で、どうなの？」

「凍りませんよう…つ…！」

(後書き)

拙作を読んで頂きありがとうございました。  
御感想、御批評。お待ちしております。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1234c/>

---

雪月恋花～セツゲツレンカ～

2010年10月8日14時12分発行